

哲学の「終わり (Ende)」に寄せて

齋藤 慶典

ハイデガーにとって、哲学とは形而上学にはかならなかった。そして、形而上学としての哲学は、「根拠 (Grund, principium, arche)」の探究をもってその本義とする。すなわち、「根拠」を見出すという仕方で遂行される思考が哲学なのである。この哲学がもはや「根拠」をめぐる思考として立ち行かなくなったとき、すなわち哲学がその「終わり (終焉)」に達したとき、それは根拠ならざる「存在」へとおのれを差し向ける「存在の思考 (思索)」へと転回する。この思考は、私たちの許にみずからを「存在者」として送り届けることで「存在」であるかぎりでの自身は身を引いてしまう「存在」を、いつもすでに失われ・忘却されたものとして「追想」し、そのようにしてそれを「見守り」(「守護」し)、かくしてその許に「安らう」。形而上学としての哲学が根拠の思考としての有効性を求めて諸学へと分岐することで解体し、すべてを何かの用に立つもの(「用象 Bestand」)へと徴発し・駆り立てる (herausfordern) 「集め立て (Gestell)」としての「存在」の動向に(すなわち「歴史 Geschick」に)呑み込まれた後に思考に残された課題は、「追想」と「守護」という「慎ましい」任務を甘受することの中で、来るべき(「将来の」)「もう一つの始まり」、すなわち「根拠」ならざる「別の始まり=元初 (arche)」に備えることだと言うのである。

私がここで試みたいのは、ハイデガーのこのような見立てと時代診断を批判することでもなければ、擁護することでもない。そのもっと手前で、そもそも思考とは何かを、それはいかなる営みなのかを、あらためて考え直すことを通して、哲学の「終わり」なる事態に(おそらくはハイデガーとは別の仕方で)応じてみたいのである。しかしその試みは、ハイデガーと独立に営まれるのではない。そうではなく、彼との対話の中で、ときに彼に導かれ、ときに彼に抗いながら、ここでの思考は進行してゆくことになるだろう。

以下、本発表は次の三つの部分から構成される。題目のみを挙げておく。

1. 思考とは何の謂いか=何が思考を命ずるのか
2. 諸学と形而上学 —— 「根拠」をめぐる
3. 哲学の「終わり」、あるいは「終わり」と哲学